

■ 用意周到に繰り返し、また繰り返す

人間工学セル生産とは

にわか記者となった私たちが研究室を訪ねると、大柄な、ゆったりとした風貌の福田康明先生が、窓からの逆光の中にどっしりと浮かび上がった。先生は、2009年度日本人間工学会優秀研究発表奨励賞に輝いた修士課程1年平田将大さんの指導教員である。取材日はあいにく、平田さんは就職活動で、会社説明会に出かけているという。平田さんの発表課題は「セル生産の習熟特性に関する解析」に関する研究である。先生には、まず、「人間工学とは何ですか、セル生産のセルとは何ですか」という私たちの質問に答えていただいた。「人間工学とは、人間の特性を取り入れた機械（物）を設計することですよ。人間の運動機能は機械の技能へコピーできます。例えば、人間の異常感知能は機械のセンサーや技能評価に応用されます」

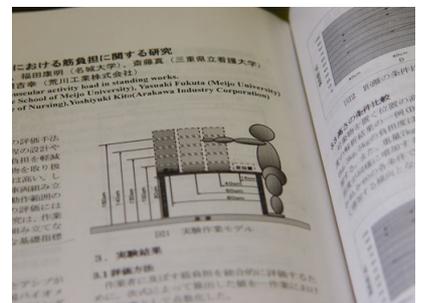


資料を見ながら研究指導の説明をする福田先生

なるほど、理工学部はこんなこともやる学部なのか。「では、セル生産とは何ですか」「すこし前までの生産工程では、それぞれの持ち場で、単能工が並んで、一つ一つの部品を製品へと組み立てていたが、現在では消費者ニーズの多様性により、一つの製品に対して複雑な工程を一人で組み立てて製品を完成させる理論が発達してきました。そのような作業工程をセル生産と言います」「なるほど、一人がいろいろな作業に係わるから、平田さんの発表課題であった“セル生産の習熟特性”が問題視されるのですね」

常に120%の準備、他流試合の奨励

先生の大学院生に対する指導方針を伺った。先生は学生達に「何事にも120%の出力をめざせ」と指導しておられるという。学会発表では、120%の準備をしておけば、80%程度の出来にはなるであろうと。質問対策も10～15ぐらいは考えておくように。その一つ一つをしっかりと文献等を調査し、整理して直ちに脳の引き出しから出せるようになるまで120%の練習を積ませる。（記者のつぶやき：フォーム、去る2月、記者担当の院生の修論発表ではそこまではやっていなかった。反省！）



先生のご研究の論文

先生は、常に学生達に他流試合をやれと発破をかけている。大学院生なら3～4回の学会発表を経験させる。学会では、他大学の同年輩の学生達がいっぱい居るから、彼らと競ってもらおう。こうした積み重ねの中で、学生諸君は、自ら問題を拾い、考えて、如何に解決するか、調査内容やアイデアをレポートにまとめ、人前で話し、振り返って考え直し、実用化のデザインへと発展させていく。一見すべてを学生に丸投げしているようでも、そこは、ジューツと傍らで目を光らせているのが先生である。

入口と同様に出口を重要視

先生は、ご自身の教育方法が正鵠（せいこく）を得ているか否か、どのように評価しておられるのか。先生は輩出した修了生が働く企業の関係者に（学会等で）職場での評価をよく聞いてみる。トレーニングを受けて物事をまとめる力、発表の力を備えた修了生たちの人事評価はすこぶる高いとのこと。学生達が憧れる企業に人を送り込めれば、本人の励みは勿論、続く後輩たちにも、「よし俺も」と伝播する。先生は大学への入口を重視するのは当然であるが、出口をしっかりと確保する教育が良い学生を集めるうえで大切だという。

学会活動への参加

お話を伺っていると、先生ご自身が常に他流試合を求めておられることが良く分かる。天白キャンパスに全国規模や地区規模の学会や研究会の開催を引き受ける機会が多くなってきている。学生諸君に、こうした学会開催を通して発表の場やアルバイトとして参加させ、役割を体験させることは、将来企業組織に就職する立場の彼らには計り知れない経験となる。

他方、学生の身分で対外活動を活発化すれば費用がかさむ。これは何処にでもある悩みである。先生は、学生に対する大学の学会参加援助システムの存在に大いに感謝している。

今後も本学会参加援助システムの継続をお願いしたい。

記事作成：薬学部 西田幹夫委員

取材概要	
日時	2010年3月2日（火）13時～14時
取材場所	天白キャンパス 12号館 211研究室
取材対象者	理工学研究科 福田康明先生
取材メンバー	薬学部 西田幹夫委員、学務センター 長沼嗣雄委員 大学教育開発センター 神保啓子